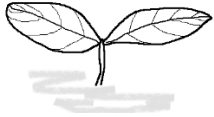


期待されない＝自由

自由を求めて

前号は、子どもはおとなの期待を受け成長するという話でした。そして今回は、いくつかある不登校のパターンのひとつについてお話します。



子どもは、おとなから求められる「理想」と自分の「現実」のすきまを埋める努力を、考えることなく重ね、その結果成長して行きます。そして思春期になり、内側から湧きあふれて来るものによって「自分らしさ」を作り始め、おとなの言う事を聞かなくなり、親から離れていくものです。

そうなるまで、のび太のように時々サボりながらも何とかおとなの期待に応えていける子は大丈夫ですが、中には怠ける事が嫌いな子もいます。向けられた期待にはすべて応えようと学習塾、水泳教室、ピアノ教室に通って努力し続けます。

寄せられる期待は成長するにつれて増え、大きくなります。それまで以上の、そして新しい努力が必要になるのです。元々あった、期待と現実の間のすきまが大きくなり過ぎた時、すきまを無視できない子は、何かをきっかけに不登校になるようです。

期待と現実のすきまを埋める努力を停止した子の不登校は、現実の『自分』に気が付いた事による不登校、「実存的な不登校」とでも呼ぶべき不登校です。この不登校の解消には『自分』探し、育ち直しが必要なようです。

☆

多くの子は、おとなから与えられた自分設計図を受け入れるだけで、考える習慣がありません。学校では、正解がある問題について考えますが、夏休みの自由研究のように、ゼロから考える学習は、みんな下手です。

自分で見つけた問題を考える。それはニュート

ンが引力を発見するようなものです。何百年の間、誰もが枝のリンゴが落ちるのを見たけれど、引力を発見したのはニュートンだけでした。

つまり、それが問題だと思わない限り、答えを見つけようとはしないという事です。そのため、『自分』を再発見するために必要な時間、不登校が続く期間は、子どもによって違うのです。

★

不登校の子には、学校に出るような働きかけがなされます。元々まじめな子ですから、残っている力をふりしぼって学校に出て行くこともあります。でも学校には、自分に「期待」する人と、おとなの期待に応えている人しかいません。

学校で同世代の子と話したり、先生から励まされたりする事によって、自分の無力さを感じ、埋め切れない「すきま」を突き付けられるのです。

☆☆

その結果、苦しさを忘れる何かを求めます。

すきまを自覚する時間、自分の無力さを考える時間がなくなるように、途切れることなく続けられるネット・ゲームや動画の視聴が一番効果的なのです。(また、つづく)

